

近江八幡市の「ふるさと学習」と地域活動の焦点 ー学習成果の活用と子どもへの取組を軸にー

安部 耕作
(近江八幡市教育委員会)

【要旨】

近江八幡市民の「ふるさと学習」の実態について、学習成果の活用と子どもへの取組に焦点を当て、活発な近江八幡市民の地域活動との関連性を確認した。この二つの特色を軸に、近江八幡市の「ふるさと学習」の実態から、何が住民の主体的で活発な地域活動を引き出しているのかを考察した。住民の活発な地域活動を引き出している源泉と推察されたことは、ここが自分のふるさとであるという「ふるさと意識」と住んでいるまちへの愛着である。人は、いつ、何をきっかけにして「ふるさと意識」や住んでいるまちへの愛着を持つのかということと、どのような「ふるさと学習」が「ふるさと意識」や住んでいるまちへの愛着を高めるのかということとを明らかにすることが今後の課題である。

1. はじめに

「ふるさと学」とは、金藤によれば「ある特定地域の文化・環境・歴史等に関する学習・研究のことであり、生涯学習事業としては、地域住民のアイデンティティの醸成、地域づくり、地域の情報発信等を目的として行われるもの」である¹⁾。滋賀大学と近江八幡市教育委員会が平成16年に行った「近江八幡市民のふるさと学習に関する調査」においては、「ふるさと学習」とは、「近江八幡の歴史や文化等について学び、近江八幡を今よりもっと知ろうとする学習」と定義している²⁾。本稿では、この二つの定義から「近江八幡市のふるさと学習」を「近江八幡のアイデンティティの醸成、地域づくり、地域の情報発信、近江八幡をさらに深く知ること等を目的として行われる近江八幡の文化・環境・歴史等に関する学習・研究」と定義したい。

近江八幡市では、豊臣秀次に由来する八幡堀の再生・保存運動や近江八幡市名誉市民第1号のウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築物の保存・顕彰活動など住民による主体的な「ふるさと学習」が活発に行われている。「ふるさと学習」を行う主体は、住民団体や自治会、まちづくり協議会等である。「ふるさと学習」を行うことによって、地域住民のふるさと意識が醸成され、様々な活動が行われている。近江八幡市の「ふるさと学習」の特色は二つある。一つは、学習成果の活用が図られていることである。「ふるさと学習」の成果の活用が活発なまちづくりにつながっている。一つは、子どもの「ふるさと学習」を重視していることである。図書館や小学校等が、子どもを対象にした「ふるさと学習」を活発に行っている。子どもの頃から、ここが自分のふるさとであると認識する「ふるさと意識」を持つことが、成人後のふるさとへの郷土愛、まちづくりへの参画等につながることが期待されるからである。この二つの特色を軸に、近江八幡市の「ふるさと学習」の実態から、

何が住民の主体的で活発な地域活動を引き出しているのか考察したい。

2. 近江八幡市民の「ふるさと学習」の実態

「近江八幡市民のふるさと学習に関する調査」の調査結果から、近江八幡市民のふるさとに対する意識に関する部分や「ふるさと学習」の実態について確認したい³⁾。

市民が近江八幡市をふるさとと感じているかという「ふるさと意識」に関する設問については、市民の62.2%が「近江八幡市はふるさとといえる」と回答した。「近江八幡市に愛着を持っている」と回答した市民は83.7%、「近江八幡市は暮らしやすいと回答した市民」は76%であった。属性別では、大きな差はないが、居住年数が20年以上、70歳代以上、居住地域が旧村部でやや回答率が高い傾向が見られた。一方で市民の37.8%が「近江八幡市をふるさととはいえない」と回答した。他の自治体と比較しなければ近江八幡市民の「ふるさと意識」が一概に高いとも低いとも言えないが、半数以上の市民が近江八幡市をふるさとと認識し、約8割の市民が近江八幡市に愛着や暮らしやすさを感じているということをここでは確認しておきたい。

次に、近江八幡市民の「ふるさと学習」の実態について確認したい。まず、「ふるさと学習」をはじめた学習動機だが、ふるさとを学ぶこと自体が目的である学習志向の方が、学んだことをまちづくりに活かすことが目的という目的志向よりも高かった。年代が高いほど目的志向になる傾向が認められた。文化財や史蹟等を訪問することは、ふるさとに関心を持ち「ふるさと学習」をはじめめる契機にもなると考えるが、文化財や史蹟、自然等への訪問経験については、市民の70.5%が訪問したことがあると回答し、市民の93.6%が訪問ニーズを持っていた。属性別にみると、訪問ニーズは30歳代と50歳代、居住年数が5年未満の人が高く、居住年数の浅い人の方が訪問ニーズが高かった。単に消費的に学習するのではなく、学習した成果を地域活動に還元していくことも大切なことである。地域の祭りや環境美化活動などの地域活動と「ふるさと学習」の関連については、地域活動をしている人の方が、「ふるさと学習」に対するニーズも実際に「ふるさと学習」を行っている率も高かった。属性別にみると、居住年数が20年以上、年代が60歳代以上、農村地域居住者の回答率が高かった。「ふるさと学習」に対する学習ニーズや学習実態は居住年数が長いほど高いが、史蹟等の訪問ニーズは、居住年数が5年未満の人が高いというように居住年数の浅い人の訪問ニーズが強いことが対照的であった。居住年数が長い人は、史跡等への訪問経験が多いだろうから、同じ所を再度訪問したいというニーズは低いだろう。訪問経験がなければ訪問ニーズも出てくるだろうから、居住年数の浅い人の訪問ニーズが強いのだろうと推察される。居住年数の浅い人が「ふるさと学習」に取り組むことで、居住地域への愛着や関心が高まり、地域活動に関わっていくことも「近江八幡市民のふるさと学習に関する調査」の結果から期待される。

3. 近江八幡市のまちづくりと「ふるさと学習」の原点

多くの近江八幡市民が「ふるさと意識」やふるさとへの愛着を感じていることは、「近江八幡市民のふるさと学習に関する調査」で確認できたと考えるが、近江八幡市の活発な地域活動の原点となっている活動が八幡堀再生・保存活動である。八幡堀は、1585年に豊臣秀次が八幡山城の外堀として整備した。1965年に水上輸送がなくなり、ハエ・蚊の発生や

悪臭問題により埋め立てが決定した。しかし、青年会議所等を主体とする「堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」を合言葉にした熱心な市民活動により、1975年に八幡堀の再生・保存が決定した。八幡堀再生や八幡堀界隈を伝統的建造物群保存地区に選定することを推進した当時は青年会議所の一員であった川端元市長は、伝統的建造物群保存地区指定で家屋に制限がかかることを洩る住民に対して「あなたがたはこんなすごい所に住んでいる。なぜそれがわからないのか」と言って説得している。その背景にある考え方として、川端元市長は、「普段、普通に暮らしていると自分のまちのすごさに気づかない。まずは住民にそれを気づかせる。外の人に自分のまちをほめてもらう。そのことで自分のまちのよさに気づき、自信になる。」と市職員や市民への講話で述べている。自分のまちのよいところに気づく、外の人に自分のまちをほめてもらうことで、住民が自分のまちに愛着や誇りを持ち、愛着や誇りをまちづくりにつなげるという発想は、当時青年会議所で共に活動していた中田元岡山公民館長等によって、後述の「おかやまいいところ 50 選」等の事業の中で引き継がれている。中田元館長は、川端元市長からまちづくりを学んだと後述している⁴⁾。

埋め立てて駐車場になる予定を覆して再生された八幡堀は、その後、水戸黄門、遠山の金さん、銭形平次、暴れん坊将軍、必殺仕事人、八丁堀の七人等数多くの映画や時代劇のロケが行われるほど美しく整備・保存されている。映画のロケに使われ、多くの観光客が訪れることが、「外の人に自分のまちをほめてもらう」ことになっている。そのことで、住民が八幡堀のよさに気づいて自信を深め、もっと八幡堀や豊臣秀次等のふるさとの歴史を学ぼうという「ふるさと学習」を行うことにつながっている。単に消費的学習として八幡堀を学ぶだけでなく、学んだことが整備・保存・顕彰活動として活かされている。八幡堀が有名になった現在も、八幡堀を守る会や地元自治会、まちづくり協議会、観光物産協会、観光ボランティア協会等の各種団体が、ほっとタウンクリーン作戦などの清掃・環境美化活動を地道に継続している。八幡堀まつりや釣り大会などの各種イベントも地元団体が主体的に行っている。八幡堀の再生・保存運動は、全小学生が後述する郷土学習テキスト『わたしたちの近江八幡』でしっかりと学んでいる。子どもたちは、幼少の頃から八幡堀がふるさとの大切な財産であることを教えられている。

このように、ハエ・蚊が発生し悪臭が漂っていた八幡堀を映画のロケに使われるほど美しく再生できた経験は、全小学生が学校の授業で学ぶことで全近江八幡市民に成功経験として継承され、市民のまちづくりへの大きな自信となっている。

4. 「ふるさと学習」の学習成果の活用

地域住民が「ふるさと学習」を単に消費的学習として行うだけではなく、学習成果を生かし活動することが、まちづくりへとつながる。近江八幡市の「ふるさと学習」は、学習成果の活用を視野に入れた取組が多く、そのことが「ふるさと学習」に基づく地域活動や地域の活性化につながっている。いくつかの事例からそのことを確認したい。

(1) 学校支援メニューフェア in 近江八幡

近江八幡市では、平成 23 年度より「学校支援メニューフェア in 近江八幡」という事業を行っている⁵⁾。「学校支援メニューフェア in 近江八幡」は、学校と地域、企業、文化施設、団体等が連携し、出前授業や工場見学受入等の学校支援プログラムを持つ企業・団体等が一同に会し、小中学校の教員等に各ブースで学校支援プログラムを説明したり、模擬

授業を行ったり、自由に意見交換等を交わすことで、企業・団体等の学校支援プログラムを学校教員に認知していただいて連携授業等につなげ、地域全体で学校を支援する気運を醸成することを目的として開催されている。

平成 26 年度の「学校支援メニューフェア in2014」には 56 の企業・団体等が出展しているが、うち近江八幡市観光ボランティアガイド協会、NPO 法人秀次倶楽部、オレガノ、近江八幡ハートランド財団の 4 団体が、「ふるさと学習」を行う住民団体である。近江八幡市観光ボランティアガイド協会は、普段の学んでいることを「秀次さんと近江八幡」という紙芝居にまとめ、自治会や小学校等に無料で出前実演している。NPO 法人秀次倶楽部は、豊臣秀次を顕彰する様々な活動を行うほか、歴史漫画『豊臣秀次』を自ら作成してその漫画を活用した出前講座、豊臣秀次ゆかりの八幡山城跡や八幡堀ウォークを体験する教室、クイズ、視聴覚学習などの活動を行っている。オレガノは、築 101 年の初期ヴォーリズ建築である第 2 代住友総理事の旧伊庭貞剛氏住宅を運営する地域住民からなる団体で、伊庭貞剛やウィリアム・メレル・ヴォーリズの紹介や旧伊庭貞剛氏住宅の見学受入や案内等を行っている。近江八幡ハートランド財団は、『琵琶湖と人の暮らしをつなぐ八幡堀』という冊子を発行するなど八幡堀の保存・継承活動に取り組むほか、ウィリアム・メレル・ヴォーリズを顕彰する活動を展開している。

学校支援メニューフェアは、普段の「ふるさと学習」で学んだことを様々な地域づくり活動に展開している各団体にとって、絶好の学習成果の活用・発表の場となっている。各団体は、普段の学習の成果や各団体の特色をパネルや展示物などで紹介し、学校支援メニューフェアの場で熱心に学校教員に説明している。展示物や資料を作成し、学校教員にプレゼンテーションすること自体が学習成果の活用となっている。学校教員と各団体の持つ学校支援プログラムがうまくマッチングできれば、小中学校等での出前授業等としてさらに学習成果が活かされることになる。学校教員の反応が鈍かった団体は、来年のメニューフェアではもっと学校教員が関心を持つように学校支援プログラムや展示・資料、プレゼンテーションを改善してくる。筆者が出展団体に学校支援メニューフェアに対する要望についてヒアリングした結果によれば、「学校支援メニューフェアを今後も続けてほしい」、「学校支援メニューフェアは、がんばりすぎると事業を続けることが難しくなるだろうから、担当者や担当課はがんばらなくていい。がんばらなくていいから今後も学校支援メニューフェアを続けてほしい。」という声が多かった。各団体にとっては、学校支援メニューフェアが貴重な学習成果の活用・発表の場となっている。自分たちの学習成果が、小中学校の授業等で活用されることは、各団体にとって大きな励みになっているようである。

（２）ふるさと探訪

近江八幡市・馬淵小学校区では、馬淵コミュニティセンター(平成 22 年 3 月 20 日、教育委員会所管の近江八幡市立馬淵公民館は、首長部局所管のコミュニティセンターへと移管されている)を拠点に「ふるさと探訪」という取組みが行われている⁶⁾。平成 21 年度に、コミュニティセンター移管前の馬淵公民館が第 62 回優良公民館文部科学大臣表彰を受けている取組である。馬淵小学校区の 14 の自治会が持ち回りで、それぞれの自治会区域内の史蹟・名所を訪ねる講座を企画する。当番になった自治会は、当該自治会区域内の史蹟・名所に馬淵小学校区民を案内する。平成 19 年度は、「語り継ぐ歴史と発展のまち・千僧供町内散策」をテーマに千僧供町の自治会が講座を企画した。地元の千僧供町の住民から同

町の歴史やまちづくり等の説明を受けた後、史跡を訪ねた後に千僧供地域歴史資料館で学習する内容で、参加者は30名であった。「ふるさと探訪」に参画した住民や当時の馬淵公民館職員は、「自分の町が講座のテーマとなった時は、自分のふるさとの発見、発掘の喜びを感じる」、「自分のまちのいい所を互いに勉強する機会になっている」、「各町の自治会が主体となって講座を企画する。自分の町が講座の年度は、自治会が自分の町から何かふるさとで光るものを出してほしいと町民によびかけて、そこから出てきたものを町が講座として企画する。このこと自体もふるさとを知るよい機会となっている。」等と語っている⁷⁾。

講座で訪ねた史蹟・名所の概要は、馬淵学区文化祭で展示することになっている。文化祭で展示することによって、学んだことを振り返り、学習成果として展示することで多くの地域住民に見てもらっている。自治会区域内の史蹟・名所を住民が自ら探して講座の形にすること自体が、住民にとっては「ふるさと学習」である。学習したことを他の自治会の住民に講座の形で説明し、文化祭で展示することによって、単に地域住民がふるさとを消費的に学習するのではなく、学習した成果を活用し活かすことにつながっている。

(3) 岡山いいとこ 50 選

近江八幡市・岡山小学校区は、農村地域であり住民のつながりが深く、地域活動に熱心に取り組む小学校区である。この岡山小学校区の岡山学区まちづくり協議会は、「岡山いいとこ 50 選」という取組みを行っている。「岡山いいとこ 50 選」とは、岡山小学校区の風景、祭り、風習、行事等地域のよいところを住民が話し合って 50 か所を選び、それを住民が自らの手によって『岡山いいとこ 50 選』という冊子にまとめて編集し、岡山小学校区に全戸配布した事業である⁸⁾。「岡山いいとこ」として選ばれた 50 か所は、「いきいき岡山ぶらりマップ」にもまとめられて冊子と併せて全戸配布され、住民が地図を見て 50 選を訪れることができるようになっている。岡山小学校区のうたとして「いきいき岡山」も作られ、「岡山いいとこ 50 選」の巻末に掲載されている。これらの「ふるさと学習」の取組を通して、一人でも多くの住民が、岡山小学校区をふるさととして認識し、岡山小学校区を好きになり、地域づくりに参画するよう図られている。これらの取組は、岡山公民館(平成 22 年 3 月 20 日、教育委員会所管の近江八幡市立岡山公民館は、首長部局所管のコミュニティセンターへと移管されている)を拠点にして行われた。その取組によって、岡山公民館は、平成 19 年に第 60 回優良公民館文部科学大臣表彰を受けている。

公民館長として岡山小学校区のまちづくりを推進していた中田元岡山公民館長は、筆者のヒアリングに対して「河川清掃等の環境美化活動は、地域の悪い所を探して、問題を改善していこうとするものである。しかし、地域のいい所に住民が気づいてもらえれば、住民はそんないい地域にごみを捨てたりしなくなる。自分の住む地域を大事にしようとする。普段気づかない自分の住む地域のいい所に住民が気づいたら、自分の住む地域が好きになり、自分の住む地域を誇りに思うので、住民はゴミを捨てるといった地域を悪くする行動をとらなくなる。自分の地域のいい所に気づくことで、自分の住む地域を悪くする行動がなくなる」と、住民に地域のいいところに気づいてもらうというまちづくりの手法のねらいを述べている。地域の「いいとこ探し」と地域活動を結びつけた取組であり、地域への愛着や誇りを高めることで、地域の課題や問題を生じさせないという課題に対する対症療法ではなく、そもそも課題を発生させないという従来のまちづくりのあり方とは発想を逆にした取組である。居住地域のよい所を探すという目的のために、自分たちのまちのよい

所を見つめ直して発見することが、住民にとっては「ふるさと学習」となっている。「ふるさと学習」によって発見したよい所は、『岡山いいところ 50 選』という冊子の発刊や、「いきいき岡山ぶらりマップ」というマップを見た人が実際にその場に行ける地図としてまとめるといった具体的な事業として、その学習成果が活用されている。

(4) まちづくり観光

近江八幡市は、『近江八幡市観光振興計画』(平成 25 年 3 月策定)の中で、「まちづくり観光」という考え方を打ち出している。「まちづくり観光」とは、自然や歴史文化に根ざした暮らしの豊かさを市民が創造し、「住んでよかった、訪ねてよかった、もう一度訪ねてみたい」という想いを抱く人が増え、そうした他からの評価を得て、さらに自らのまちの暮らしを豊かにするという循環を目指す取組である。市民が地域のよさを知り理解して、まちの魅力を発揮していくことを基礎に観光客へのホスピタリティも高める。ハコモノや史跡ではなく、自然や歴史文化を維持継承した生活や人の営みそのものを観光資源とする考え方である。居住地域のよいところに着目し、それを起点にまちづくりを発展させる「岡山いいところ 50 選」の取組を市全域に広げるような取組である。

居住地域の自然や歴史文化、生活等を正しく理解するためには、「ふるさと学習」が必要になる。近江八幡市には、八幡堀の再生保存運動や「ふるさと探訪」、「岡山いいところ 50 選」等多くの「ふるさと学習」の成果を活用した取組の蓄積がある。学校支援メニューフェアに参画し、学校や地域に出前講座を行うような「ふるさと学習」を主体的に行う秀次倶楽部等の多くの住民団体にも「ふるさと学習」の成果を活用した取組の蓄積がある。それらの蓄積が「まちづくり観光」の基盤となっている。

(5) 風景計画⁹⁾

近江八幡市は、景観法に基づき、平成 17 年 3 月、近畿で初の「景観行政団体」となっている。市内全ての風景は、先人から受け継いだ大切なもので市民皆の共有財産と定めた「近江八幡市風景づくり条例」を平成 17 年 4 月 1 日に施行し、「風景計画」の第 1 弾として「水郷風景計画」を策定した。この計画は平成 17 年 9 月 1 日から施行となり、全国初の景観法に基づく景観計画となっている。平成 19 年には八幡堀境界を伝統的風景計画に定めている。景観法は、良好な景観の形成に関する景観計画を策定して望ましい景観を守っていくことを定めている。景観法では美しい景色を表す語句として「景観」を使っているが、近江八幡市では、景色に人の営みを加えた「風景」を使用している。そのため、近江八幡市では、景観法に基づく「景観計画」を「風景計画」と読み替えて制定している。

風景計画は、指定区域に良好な景色を届け出制で作ることが目的である。届け出制なので強制力はないが、届け出により計画にあった風景に誘導することが可能になり、うっかり景観が破壊されることがなくなる。風景計画は、計画区域の住民が主体になって作るので、風景に関心の薄い住民が計画を作ると規制がほとんどない意味のない計画になる可能性もある。地域の歴史や風土に見合う風景計画を作るためには、地域住民の「ふるさと学習」が必要になる。風景計画は、いい景観作りや観光が目的ではない。住民の歴史・伝統・文化を継承することが目的であり、その結果として風景が保存されることになる。

なぜ近江八幡市に風景計画が策定されたのかといえば、風景に関心の高い市民性がある。八幡堀を埋め立て駐車場や道路にする計画に対して、地域の風景とともに伝統や文化を継承しようという市民運動が沸き起こり八幡堀が再生され、町並み保存へと引き継がれた。

新町通りなどは、重要伝統的建造物群保存地区として現在も残されている。近江八幡市役所の風景計画担当者は、「景観は地域の自然・伝統・文化の顔。景観づくりには、地域の魅力を高めるためのあらゆる要素が詰まっている。景観計画の策定を通して、行政も住民も自分たちの地域の文化や伝統を見つめ直すことができた」と述べている。風景計画づくり自体が「ふるさと学習」であり、「ふるさと学習」の成果の活用となっている。副次的効果として、景観計画策定の頃から大幅に近江八幡市への観光客数が増加している。観光客は、平成15年の174万人から平成17年には246万人と約70万人増加している。

5. 子どもを重視した「ふるさと学習」の取り組み

人にとってふるさととはどこなのか。生まれた場所か、長く住んだ場所か、幼少の頃に育った場所か、今現在住んでいる場所か。生まれも育ちも現在の居住地も同じ場所の人には、ふるさととは一つしかないだろうが、多くの人は、親の転勤や進学、就職等の理由によって複数の地域に移り住むことになるだろう。複数の地域に住んだ人は、その中からどこをふるさとと認識するのだろうか。筆者は、福岡県で生まれ小学4年生までそこで育ち、小学4年生の時に、親の転勤で滋賀県に移り住んだ。以後、35年以上滋賀県に住んでいる。しかし、筆者がふるさとと感じるのは福岡県である。子どもの頃の体験や生活は、どこが自分のふるさとなのかという「ふるさと意識」に大きく影響を与えるだろう。近江八幡市では、子どもたちへの「ふるさと意識」の涵養を重視し、子どもを対象とした多様な「ふるさと学習」を行っている。

(1) 小学校での郷土学習

近江八幡市では、市内小学校教諭が作成した郷土学習テキスト『わたしたちの近江八幡』で、全小学生在近江八幡市の歴史や文化等について学習している¹⁰⁾。近江八幡市民のまちづくりのシンボルとなっている八幡堀の保存再生運動は、テキストの中で、埋め立て前の汚れた堀と再生後の美しい堀の比較写真など多くの写真や保存再生運動に関わった人々の声を紹介して、八幡堀の大切さを実感しながら学べるように工夫されている。各小学校区の様子や図書館の紹介、特産物、普段の生活や環境、安全、世界とのつながりなど、多様な角度から近江八幡市を紹介し、児童が近江八幡市に関心を持ち、様々な角度から近江八幡市を学べる構成となっている。

このようなテキストを小学校教諭が学習計画に基づいて体系的に教えている。児童が近江八幡市について広い角度から関心を持ち、普段の生活で訪れる場所や施設の成り立ちや仕組みなども理解しながら、近江八幡市をふるさととして受け入れられるように、子どもを対象とした「ふるさと学習」が行なわれている。

(2) 図書館の取組

近江八幡市立図書館は、郷土資料の収集・整備・保存・公開に力を入れており、書籍等による個人学習の面から市民の「ふるさと学習」を支えている。『近江八幡市立図書館サービス10カ年基本計画』（平成25年3月刊行）は、5つの重点項目の一つとして地域資料整備について「(3)地域資料の整理・保存と公開を進めます。」と定めて、地域資料を積極的に収集・整理・公開し、郷土資料を収集する地域の図書館としての性格を鮮明に打ち出している。月刊の図書館だより「としょかん日和」は郷土の書籍を毎回紹介するコーナーとして「古今東西おうみはちまんふるさと学」を設け、毎回郷土の書籍を紹介することで市

民の郷土への興味や関心を継続的に引き出すことをねらいとしている。図書館の重点目標に従って、専門職である図書館司書が郷土資料を収集・整備・保存して公開しているため、近江八幡市立図書館は、近江兄弟社やウィリアム・メレル・ヴォーリズ関連の貴重な資料を多数所蔵している。郷土資料を収集する図書館として、外部からの評価も高く研究者も頻繁に調査に訪れており、こうした郷土資料重視の姿勢が市民の「ふるさと学習」を書籍・資料の面から支えている。

近江八幡市立図書館は、子どもの「ふるさと学習」支援にも力を入れている。『近江八幡市立図書館サービス 10 年基本計画』は、5 つの重点項目の一つである「(3)地域資料の整理・保存と公開を進めます。」という項目の中の重点 5 項目の一つとして、子ども向け郷土資料の整備を明記している。子どもの理解度に合わせ出版されている郷土資料が少ない現状を鑑み、二次資料が必要として、行政が発行しているパンフレットや冊子等を収集・活用したり、特定のトピックごとに資料や情報をまとめるといったことにより、子どもの「ふるさと学習」を支援している。このように、近江八幡市立図書館は、子どもの「ふるさと学習」支援を重点目標として、図書館基本計画に盛り込んで子どもへの働きかけを重視している。

(3) 行政の子どもに対する取組

前述の風景計画を策定した際には、近江八幡市役所の風景計画担当職員が風景計画地域に立地する島小学校に出向き、景観に関する総合学習を授業の中で行い、風景計画の概要やねらいを説明している。子どもの頃から、地域の風景に誇りと愛着を持たなければ、届け出制により住民が主体となって作る風景を守っていくことができないからである。近江八幡市では、このように子どもにふるさとの歴史や文化、営みを理解させて、将来はそれを守り継承する大人として育てていこうという意識が強い。授業に出向いた近江八幡市役所の担当職員は、「大人は自由を規制する風景計画をいやり、厳しい風景計画を作ると若者が地域から出て行ってしまうと危惧していたが、子どもたちはかえって水郷やそれに見合ったまちなみが守られた風景が好きだと授業の中で答えていた。」と述べている。

6. 総括

本稿では、近江八幡市民の「ふるさと学習」の実態について、学習成果の活用と子どもへの取組という二点に焦点を当てて、活発な近江八幡市民の地域活動との関連性を確認した。この二つの特色を軸に、近江八幡市の「ふるさと学習」の実態から、何が住民の主体的で活発な地域活動を引き出しているのかを考察したい。

まずは、「ふるさと学習」の学習成果の活用が地域活動にどのようにつながっているのかを確認したい。生涯学習行政では、学習成果の活用の重要性が叫ばれてから久しい。個人が講座等で学ぶだけに終わり学んだことが社会で生かされない消費的学習に公金を投入することは難しい。それゆえ学習成果をまちづくりにいかに活用するかということが重要であるという議論である。しかし、学習成果を活用することは簡単ではない。活用する場所や機会は実際には少ないからである。「ふるさと探訪」は、地域のよい所を自治会が自分で探して地域住民に講座として説明し、学習した成果を文化祭に展示するというように、既存の組織・事業である自治会・文化祭をうまく活用している。「ふるさと探訪」の展示が文化祭の盛り上がりにも寄与することになる。また、文化祭という既存の事業を活用するので、

「ふるさと探訪」の担当者にとっても大きな負担にはならない。文化祭の場を活用せず、「ふるさと探訪」の担当者が単独で会場を手配し、展示も行い、来場者を募るとなれば大きな負担になる。担当者の大きな負担にならず、既存事業を活用し気軽に実施することで、学習成果の活用を場を確保している。文化祭と「ふるさと探訪」の双方の担当者に相互互恵関係がある。「ふるさと探訪」の相互互恵関係や気軽さ、負担を少なく実施しているという点は、学習成果を地域活動に活用する上で寄与している¹¹⁾。「岡山いいところ50選」のように自分たちのまちのよいところに住民に気づいてもらうという発想も学習成果の活用につながる試みである。自分たちのまちのよいところに気づき愛着や誇りを持てば、それを守っていこう、もっと学ぼう、地域内外に向かって発信していこう、という「ふるさと学習」で学んだことを活用する行動につながっていくからである。これが、八幡堀保存・再生運動のように映画のロケ地に選ばれ、多くの観光客が訪れるというような形で外からほめられるということになれば、さらに大きな自信や誇りになり、もっとふるさとを守り、深く学び、内外に発信していこうという学習成果の活用につながる。

次に、子どもが「ふるさと学習」を行うことの大切さを確認したい。近江八幡市民のまちづくりの原点の一つは、八幡堀の保存・再生運動である。ハエ・蚊が漂う八幡堀を映画のロケ地へと再生させたことが市民にとって大きな自信や成功体験となっており、その後の市民による様々な地域活動につながっている。この八幡堀再生・保存運動は、全小学生に授業の中で郷土学習テキストを用いて、小学校教諭による学習計画に基づいて教えられている。このことによって、八幡堀再生・保存運動が運動に携わった一部の人だけの経験に終わらず、次世代を担う全ての子どもたちに正確に伝えられている。このように小学校で「ふるさと学習」を受けた子どもたちが大人になることによって、何か地域活動をやってみようという機運が近江八幡市の中で醸し出されている。このような地域活動は、青年会議所や自治会等の地縁団体が色濃く残る近江八幡市だからできたことであり、都市部の自治体で同じような地域活動をすることは困難かもしれない。しかし、子どもの頃の記憶や生活体験は、「ふるさと意識」やふるさとへの関心に大きく影響しており、その後の「ふるさと学習」への取組やまちづくりへの参画態度に大いに関係していくことが推察される。管見するところ、各地の「ふるさと学習」は大人や高齢者を対象にしたものが多い。近江八幡市には、近江八幡市が好きで熱心にまちづくりに取り組む市民が多い。子どもの頃からしっかりとふるさとについて学んでいることが一因のように感じる。多くの子どもたちが「ふるさと学習」を行うことが望まれる。

近江八幡市民の「ふるさと学習」について、学習成果の活用と子どもへの取組という二点に焦点を当てて、この二点と活発な近江八幡市民の地域活動との関連性を確認したが、何が住民の主体的で活発な地域活動を引き出す源泉となっているのかを考察したい。

確認した結果から十分な根拠があるとは言いきれないが、住民の活発な地域活動を引き出していると感じることは、ここが自分のふるさとであるという「ふるさと意識」と住んでいるまちへの愛着である。最も地域活動を引き出す源泉となっていると感じることは、「ふるさと意識」である。「ふるさと意識」はその場所で生まれたという認識、子どもの頃の体験や生活によって芽生えたと考える。しかし、成人後に近江八幡市へ転入した住民が熱心に地域活動に取り組む事例も少なくないので、住んでいるまちへの愛着も重要である。ここが自分のふるさとであるという「ふるさと意識」と住んでいるまちへの愛着が、人の

「ふるさと学習」への意欲を高め、その学習成果を活かしてまちをよくしようとする活動につながっている。子どもの頃の経験が重要であるということであれば、子どもの頃の「ふるさと学習」が極めて大切ということになる。子どもの頃に「ふるさと学習」を行うことは、「ふるさと意識」の形成に寄与するだろう。人が「ふるさと意識」や愛着を持ったまちをもっと学びもっとよくしていきたいと思うのであれば、将来にわたって長く地域への貢献が期待される子どもへの教育投資効果が最も高いということになる。

今後の研究では、人は何をきっかけにして、いつ、「ふるさと意識」や住んでいるまちへの愛着を持つのかという「きっかけ」と「時期」の二つを明らかにしたい。この二つに焦点を当てて、どのような「ふるさと学習」が「ふるさと意識」や住んでいるまちへの愛着を高めるのかということを究明していきたい。

【注】

- (1) 『生涯学習社会教育実践用語解説』財団法人全日本社会教育連合会、平成 14 年、121 頁（金藤ふゆ子執筆）
- (2) 近江八幡市教育委員会・滋賀大学『近江八幡市民のふるさと学習に関する調査報告書』平成 16 年、172 頁
- (3) 同上。数値等は同調査の結果である。同調査の目的・調査結果や考察結果については、右記拙著参照。安部耕作「近江八幡市民のふるさと学習に関する考察」『日本生涯教育学会論集・28』平成 19 年
- (4) 川端元市長のまちづくりの考え方は右記参照。川端五兵衛『まちづくりはノーサイド』ぎょうせい、1991 年
- (5) 安部耕作「人口減少時代における生涯学習・キャリア教育の展開－Win－Win 関係の企業・団体の学校支援への着目－」『日本生涯教育学会論集・34』平成 25 年。安部耕作「キャリア教育のイノベーション」、生涯学習研究 e 事典、日本生涯教育学会、<http://ejiten.javea.or.jp/>、平成 26 年 7 月 25 日参照
- (6) 「ふるさと探訪」の毎年度の取組みは、毎年度発行する右記冊子参照。近江八幡市教育委員会『近江八幡市生涯学習・社会教育活動のまとめ』
- (7) 平成 21 年に筆者が松本元馬淵公民館長にヒアリングした結果である。
- (8) 岡山学区まちづくり協議会『岡山いいところ 50 選』平成 16 年
- (9) 安部耕作「地域活性化の方法と実践－近江八幡市のふるさと学習の実践－」（第 6 回「ふるさと春日井学」研究フォーラム講演資料、平成 25 年 8 月 4 日、於：春日井市民活動支援センター）
- (10) 近江八幡市教育委員会社会科副読本改訂委員会『わたしたちの近江八幡』平成 23 年 4 月
- (11) 生涯学習推進にあたって相互互惠関係や気軽に実施すること等の重要性については右記拙著参照。安部耕作「持続可能性に視点を置いた生涯学習の推進－滋賀県近江八幡市の学校支援地域本部事業を軸とした事例－」『日本生涯教育学会年報第 34 号』日本生涯教育学会、平成 25 年